

遠隔授業「心理学概説」を通しての検討

山口 孔丹子

— 目 次 —

はじめに

1. 「心理学概説」の授業概要

2. 問題と目的

3. 調査

4. 考察

おわりに

キーワード：遠隔授業、教材研究、コミュニケーション

はじめに

2020年度に新型コロナウイルス感染症が世界中に広まった。四国学院大学では、授業については前期の授業を2ヶ月間遠隔授業に切り替え、6月から三密（密閉・密集・密接）を避るための様々な対策を講じた上で、一部の対面の授業を再開した。対面授業の再開にともない、本講義「心理学概説」も、4月の時点では4月～5月の全学遠隔授業期間のみ遠隔授業を行なう予定であったが、受講生が100名を超えたため、全15回すべての講義を遠隔授業で行なうことになった。

本報告では、学生の授業アンケートをもとに、遠隔授業についての検討を行な

う。考察では、遠隔授業を通して見えてきた大切な要素について検討する。

1. 「心理学概説」の授業概要

四国学院大学では、学問分野を越えて学ぶことができるリベラルアーツを実践している。また、メジャー制度により、専攻するコースを超えて幅広い分野から学びたい学問を選択して学べる制度を取り入れている。この制度により、心理学・カウンセリングメジャーの講義「心理学概説」は、社会福祉学部 of 学生だけではなく、文学部、社会学部の学生もまた履修している。

講義「心理学概説」では、心理学の基礎的な内容を中心に講義を展開している。講義内容には、専門的な学びとあわせて講義内容を自分の身近な問題として考察できるように工夫している。身近な問題とは、具体的には、心理検査と自己分析、青年期の発達課題や精神疾患とその治療についてである。これらの身近な問題を考察することを通して、心の健康の保持増進にも結果的に役立つ内容となっている。

(1) 授業概要

「心理学概説」のシラバスは以下の通りである。全15回の授業である。

表1の通り前半の心理学の基礎と後半の実践とが結びつくように構成されている。第1回から第6回までは心理学の基礎について理論を中心に学ぶ。知覚の特徴、情動、条件づけ、記憶と学習、知能は、心理学の基礎として大変重要な学びである。後半は、心理測定、パーソナリティ、発達心理学、対人関係の形成、いろいろな異常行動、力動論と療法などを学ぶ。後半では、具体的な事例を挙げながら、実践的な学びとなるよう考慮している。心理学概説の全体を通して、理論と実践が結びついて学べるように工夫している。前半と後半にまとめと小テストのかわりとなるレポートの提出を求める。

表1 心理学概説シラバス

1	心理学の成り立ちと 人の心の基本的な仕組み及び働き	9	パーソナリティ
2	知覚の特徴	10	発達心理学
3	情動	11	対人関係の形成
4	条件づけ	12	いろいろな異常行動
5	記憶と学習	13	力動論と療法
6	知能	14	後半のまとめとレポート
7	前半のまとめとレポート	15	まとめ 心理学概説
8	心理測定		

（2）授業例

遠隔授業の実施にともない、前半の第1回から第6回までである心理学の基礎では、要点をまとめたテキストとなる資料を教員が作成した。第2回授業のアウトラインを表2-1に記す。後半の8回から13回では、具体的な事例を挙げながら、実践的な学びとなるよう考慮した。第8回授業アウトラインを表2-2に記す。

① 第2回授業（前半授業例）

第2回『知覚の特徴』の授業についてアウトラインを表2に示し、内容について説明する。第2回『知覚の特徴』では、1. 知覚・認知とは何か、2. 形の知覚について学ぶ。課題は、「1. 知覚について学んだことを200字以上でまとめなさい。2. 知覚について学んだことで疑問点や質問を2つ以上書きなさい。」とし、知識の定着を図った。

表2-1 第2回授業アウトライン

	知覚の特徴（概要）
1	知覚・認知とは何か 〈考えよう〉知覚、感覚、認知の区別ができるようにしっかり整理してください。
2	形の知覚 （1）図と地（2）群化の法則 〈調べてみよう〉群化の法則には、他にどのようなものがあるでしょうか。 （3）空間知覚（4）運動知覚（5）知覚のずれ（6）知覚の選択性 （7）社会的認知 〈参考〉ブルーナーの実験
	課題 1. 知覚について学んだことを200字以上でまとめなさい。 2. 知覚について学んだことで疑問点や質問を2つ以上書きなさい

② 第8回授業（後半授業例）

第8回『心理測定』の授業についてアウトラインを表3に示し、内容について説明する。第8回『心理測定』では、心理テストを行い、その結果を記入することを課題とした。

心理テストを購入し、心理テストを行なってみる。さらにその結果をもとに、解説を見ながら自分自身を自己分析するというものである。

解説では、1. 回答例：課題1～4の回答例、2. スコアの見方の注意点、3. 資料、参考資料の添付、4. 主要資料のまとめを行なった。各自が課題を行いながら、心理テストを理解し、自己分析を行った。このような実践的な課題を通して理解不足のための臨床的な問題が起らないよう、心理テストの選定を考慮し、心理テストのスコアの見方の注意点などを丁寧に伝えるように心がけた。

表 2－2 第 8 回授業アウトライン

	心理テスト概説
1	解説 1. 回答例：課題 1～4 の回答例をしめす。 2. スコアの見方の注意点 3. 資料、参考資料の添付 4. 主要資料のまとめ
2	課題 1. 心理テストの結果の点数を記入してください。 2. 一番高かった項目と点数を記入してください。 3. 資料をみて、自分の特徴についてわかったことを書いてください。 4. 心理テストを行なって気がついた自分の特徴を書きなさい。
	質問事項をうけつける旨を明記

（3）遠隔授業のために工夫した点

遠隔授業では、教材研究を行い毎回 1 回読み切りのテキストを作成した。テキスト作成ではわかりやすい解説を書くように心がけた。

前半の第 1 回から第 6 回までは心理学の基礎では、要点をまとめたテキストとなる資料を教員が作成した。テキスト作成では、〈考えよう〉〈調べてみよう〉などの項目を設け、学んだ知識を整理することができるように工夫した。またテキストの最後には、おまけや関連の参考資料、読み物、挨拶などを加え、興味をもって読みやすいようなものになるように努めた。課題では、疑問点や質問を書くように促し、学んだことの理解度を確認した。

後半の 8 回から 13 回では、具体的な事例を挙げながら、実践的な学びとなるよう考慮した。課題に調べてまとめるものや、実際に行なって分析するものなど理解と応用の組み込まれた学びとなるようにした。課題完成のために、資料の精読やレポート作成の技術を必要とした。そのため、論文を読み解く力や、レポートを作成する力がつくように教材を工夫した。レポート作成のためには、模範レポートや、レポート作成のための解説を加え、苦手意識なくレポートを書くことができるように促した。

2. 問題と目的

「心理学概説」の講義の達成目標は、心理学の成り立ち、人の心の基本的な仕組み及び働きを学ぶことである。この講義を通して、心理学の理論と實際を学ぶ。講義では、専門的な学びとあわせて講義内容を自分の身近な問題として考察できるように工夫している。

「心理学概説」では、心理学への関心をもち、心理学の知識を日常生活や専門的な場面で役立てたいと願い受講している受講生の割合も多い。授業に対する満足度では、総合的な満足度で「満足」64.9%、「おおむね満足」16.2%の評価を得ており、受講生の満足度の高い講義であることがうかがえる。これにより、講師の授業達成目標と受講生のニーズは合致している授業であると考えられる。

遠隔授業「心理学概説」を実施したことを通して、著者は、教材作成、授業の構成、教授方法において、現時点でのできるかぎりの工夫を行なった。しかし、学生にとっては、不便や不都合、学びにくさなどがあることが考えられる。遠隔授業「心理学概説」の教育実践を振り返ることで、さらに発展的な授業を行なうための要素を発見できるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、受講生の視点から「心理学概説」の遠隔授業の良かった点、問題点を調査する。考察では、遠隔授業の実践から得られた教育実践における重要な点を検討する。

3. 調査

本章においては、「心理学概説」の遠隔授業に関する調査を行なう。調査結果をもとに、遠隔授業の実践から得られる教育実践における重要な点を検討する。

(1) 目的

「心理学概説」の授業において遠隔授業の良かった点、問題点を調査する。

（2）方法

調査対象者：X大学Y年度「心理学概説」履修生 28名

（履修生数103名中回収28名 回収率 27.2%）

28名（男性14名、女性14名）

2年生12名、3年生11名、4年生5名

調査方法：記述式質問紙調査 質問項目は、「遠隔授業の良かった点」「遠隔授業の問題点」分析方法：KJ法による分析 カテゴリー分類

（3）結果と考察

3-1 遠隔授業の良かった点

（1）結果

遠隔授業の良かった点（複数解答 数字単位 名）については、4つのカテゴリーに分類することができた。カテゴリー名はそれぞれ『学びの深まり』『教材の重要性』『通学しない利点』『遠隔授業による利点』であった。それぞれを小カテゴリーに分類した。結果について、表3-1にまとめた。表3-1-1～表3-1-4は回答の記述を抜粋し記した。

表3-1 調査結果：遠隔授業の良かった点（数字 延べ数単位 名）

1	学びの深まり 20 (1)自分のペース 9 (2)自主性 5 (3)資料の読み返し 5 (4)集中 1	3	通学しない利点 6 (1)感染回避 4 (2)時間の有効活用 2
2	教材の重要性 9 (1)わかりやすい教材 5 (2)課題の効果 4	4	遠隔授業による利点 2 (1)忘れ物をしない 1 (2)先生方と連絡をとりやすい 1

表3-1-1 良かった点（抜粋） （カテゴリー：『学びの深まり』）

- 対面授業では、時間内に提出用のレポートを書けないことが多いので自分のペースを守りながら自分の都合の良い時間にできたこと。
- レジュメを読み、自分で調べて課題を提出するため、ただ聞くだけの講義形式に比べ、身についた。
- 自分で調べて課題を記入するために資料をしっかりと読み込まねばならず、話を聞いているよりも難しく感じる時もあったが能動的な学習になったと思う。
- 授業をいつでも見られるので復習がとてもやりやすかった。
- 他者に気をつかうこともなく、気をとられることもなかったのも、とても集中できた。好きな場所で学べるので、自分が集中できる環境で学べてよかった。

表3-1-2 良かった点（抜粋） （カテゴリー：『教材のわかりやすさ』）

- 毎週送ってくださる課題が明確にされていてわかりやすかったです。また授業内容も面白く、対面だったらもっと面白かっただろうなと思いました。
- Word文書での遠隔授業であったが、文面も具体例が多く、非常にわかりやすいものであった。
- 学んだことで疑問点や質問を考える、という課題のおかげで、更に学びが深まった。
- 課題が適量で、期限も一週間あってよかった。

表3-1-3 良かった点（抜粋） （カテゴリー：『通学しない利点』）

- 感染症の危険が無い点
- 家から出ずに授業に参加できるのはいいと思った。県外勢にはうれしい。
- 通学時間がなくなりその時間を有効活用できる点

表3-1-4 良かった点（抜粋） （カテゴリー：『遠隔授業による利点』）

- 忘れ物をしない点
- 質問などできるように先生方のメールアドレス一覧を用意してくれたことが助かった。

(2) 考察

3-1-1 学びの深まり

遠隔授業の良かった点として第1のカテゴリーに『学びの深まり』が挙げられた。「レジュメを読み、自分で調べて課題を提出するため、ただ聞くだけの講義形式に比べ、身についた。」「授業をいつでも見られるので復習がとてもやりやすかった。」「・・・話を聞いているよりも難しく感じる時もあったが能動的な学習になったと思う。」のような記述があった。遠隔授業という中で、自主性を高め、能動的な学習の実現ができたと考えられた。

3-1-2 教材のわかりやすさ

教材のわかりやすさにおいては「・・・文面も具体例が多く、非常にわかりやすいものであった。」「・・・授業内容も面白く、対面だったらもっと面白かっただろうなと思いました。」との記述があった。また課題については「課題が適量で、期限も一週間あってよかった。」との記述があった。

わかること、面白く学べること、そして課題の明確さや量が適量であることの重要性が考えられた。

3-1-3 通学しない利点

「感染症の危険が無い点」などの記述があり、通学による感染の回避、通学時間の無いことによる時間の有効活用が挙げられた。遠隔授業の実施により、学校に集まらないこと、通学によって人と接触しないことが実現でき、感染回避をすることができた。

3-1-4 遠隔授業による利点

「忘れ物をしない点」「先生方のメールアドレスが得られた点」が挙げられた。とくに先生方のメールアドレスを得たことにより、先生と個人的に連絡をとる機会は対面に比べて増えた学生がいたと考えられる。メール等による方法の方が、先生とコミュニケーションをとりやすい学生が一定数いることが考えられた。遠隔授業を行うことにより、先生とのコミュニケーションをよく取り、学びを深めることができるという利点もあったことがうかがえた。メール等による連絡が日

常的である、いわゆるデジタルネイティブ世代だからこそその利点というべきであろう。

3-2 遠隔授業の問題点

(1) 結果

遠隔授業の問題点（複数解答 数字単位 名）については、3つのカテゴリーに分類することができた。カテゴリー名はそれぞれ『コミュニケーションの必要性』『遠隔システムの問題』『問題点なし』であった。それぞれを小カテゴリーに分類した。結果について、表3-2にまとめた。表3-2-1～表3-2-3は回答の記述を抜粋し記した。

表3-2 調査結果：遠隔授業の問題点（いやだった点、困った点）（数字 延べ数単位 名）

1	コミュニケーションの必要性 16 (1) 質問や補足説明の必要性 11 (2) 文字資料の限界 2 (3) 意欲喪失 2 (4) 友達存在 1	3	問題点なし 4
2	遠隔システムの問題 14 (1) 機器の操作 9 (2) 課題提出の日程管理 2 (3) 提出期限 2 (4) 画像状態 1		

表 3-2-1 問題点（抜粋） （カテゴリー：『コミュニケーションの必要性』）

- 去年の対面授業時は前回の授業の質問の回答や復習を行っていたが、遠隔授業では質問の回答が少なかったと感じました。遠隔授業のため難しいですがあればより良かったと感じました。
- 先生とのコミュニケーションが取れないことは残念だと思った。
- 文字だけではわかりにくいところがあり、対面で説明を聞いたかったと思った。
- 文字だけの授業だったため、自分自身、授業内容をあまり理解できていない気がした。
YouTubeなどの動画配信サイト・アプリを使って授業をおこなっている先生もいらっちゃって、動画での授業の方が理解しやすかった。
- 対面でないためどうしても意欲がかけてしまい「学ぶ課題をこなす」になりがちだった。
- 対面授業だと知り合いが一緒だったり、友達ができたりして、何か聞くことができたりしたかもしれませんが、遠隔授業なので、誰が受講しているかもわからないし、友達もできず、少し気になることができて誰かに聞きたくても聞けないのが困りました。

表 3-2-2 問題点（抜粋） （カテゴリー：『遠隔システムの問題』）

- パソコンがないとすごく不便だった。4人兄弟で全員が遠隔授業となりパソコンの取り合いになり課題に取り組む時間がかぎられていたが、他の教科も課題がでるため大変だった。
- パソコンなどの機器のトラブルが起こる。
- メールで課題を送信していた際にネット環境の影響かメールの送信がちゃんとできていないことがあり、その点が困った。
- 提出期限を意識していないと簡単に課題を出し損ねることにもつながりかねない。

表3-2-3 問題点（抜粋） （カテゴリー：『問題点なし』）

- ありません。
- 遠隔授業の問題点に関しては特に何も感じなかった。

(2) 考察

3-2-1 コミュニケーションの必要性

質問への即時の回答や補足説明ができない点が問題点として挙げられていた。とくに「対面でないためどうしても意欲が落ちてしまい「学ぶ<課題をこなす」になりがちだった。」では、対面によって学習意欲が増すことがうかがえた。さらに、「・・・動画での授業の方が理解しやすかった。」のように「文字よりも動画」、「動画よりも対面」のように、理解度や学習意欲が増すことが考えられた。

また、「遠隔授業なので、誰が受講しているかもわからないし、友達もできず・・・」より、学生と先生のコミュニケーションに加えて、学びにおける学生同士のコミュニケーションの重要性も考えられた。授業が出会いの場、学生同士の教え合いの場として重要な役割を果たしていることがうかがえた。

3-2-2 遠隔システムの問題

パソコンなどの機器のトラブル、ネット環境についてオンライン・オンデマンド講義の導入においては十分な準備が必要であることを再認識した。「4人兄弟で全員が遠隔授業となりパソコンの取り扱いになり」に見られるように1人1台のパソコン機器の準備が必要である。その他、課題が送信できないことがあるなどのシステム上の問題や対面でないため課題提出忘れなどが挙げられた。

3-2-3 問題点なし

28名中4名が問題点を感じず、授業に取り組むことが出来たと回答した。遠隔授業に柔軟に対応でき、学びを深められたということであろうか。または、対面授業で直接講義を受けることと、遠隔授業で講義を受けることとの間に、元々感覚的差異すら無い人が一定数いるということであろうか。遠隔授業で現場全体が疲弊気味であることはかくしきれないので、思いやりの心で多少の問題点はあげなかったということも考えられる。大きな問題点があれば書くであろうことから、「問題点なし」との回答から、どのような環境あれ一定以上の学びの質を保つことができるという積極的な結果を得ることができた。

4. 考察

調査結果より、受講生の視点から遠隔授業の良かった点は、カテゴリー『学びの深まり』『教材の重要性』『通学しない利点』『遠隔授業による利点』に分類することができた。遠隔授業の問題点は、『コミュニケーションの必要性』『遠隔システムの問題』『問題点なし』に分類することができた。各カテゴリーを検討し、遠隔授業「心理学概説」より教育実践として「学びを深める」とことと「コミュニケーション」の重要性が再確認できた。

そこで考察では、第1に「学びの深まり」に関連して、わかる感覚という概念を中心に考察し、第2に「コミュニケーション」に関連して、学生と教員のコミュニケーションの場合と学生同士のコミュニケーションの場合とに分類して考察する。

(1)「わかる」感覚

講義内容が「わかる」ことによって講義を「面白い」と感じることを、私たちはこれまでに体験している。わからない講義は「つまらない」講義と感じたことも事実である。心理学概説は心理学を学び始めた学生が多く履修する。初めて心理学を学ぶ学生を対象とする科目のため、特に「わかる」部分が増えていくことが重要である。そのため、対面であるか遠隔であるかにかかわらず、元来「わかる感覚」を味わえる授業にするための工夫が必要であった。

対面の授業では、教員が一方向的な講義を行い、「わからせてしまう」という点がある。学生はこのようなトーク中心の講義によって「わかった気」になる。その結果、対面の講義では「講義を聴くとわかった気になるが、あとで復習するとわかっていないことに気づく」ことがよくある。講義形式としては、対面の形式が最も「わかる」ものと学生に認知されており、ついで動画の形式が資料を読む形式よりも「わかる」と回答されている。実はこれは「わかった気になる」順番といったほうが真実に近いのではないだろうか。ただ「わかった気になる」から講義を面白いと感じることは否定されるべきかということと必ずしもそうではない。「わかった」から面白いと感じるほうが学生にとっては良いには違いないが、「わかった気になる」ことで、さらに学習を重ねていき、最終的に「わかる」ところ

へ移行していくことはしばしばある。入り口が若干遠いというだけで、方向は間違っていない。

以上のことをふまえて、遠隔授業での「わかる」感覚について考えてみる。質問紙の結果には、遠隔授業の良かった点として「文面も具体例が多く、非常にわかりやすいものであった。」との記述が挙げられていた。このことから遠隔授業であるため、教材のわかりやすさがことさらに「わかる」感覚の後押しに重要であることが考えられた。対面でのトーク中心の講義に代替する「わかりやすい教材」は、遠隔授業における「わかる」感覚を得るために必須であり、それが学生の学ぶ姿勢を後押しする。

遠隔授業には、学生の学ぶ姿勢がこれまで以上に必要である。そして、わかった感覚を読むという行動を通して得る。遠隔授業の資料を読む講義では、そのようにして講義を受けるうちに読んで理解する力を増進していく。遠隔授業の良かった点として「自分のペースを守りながら」「能動的な学習になった。」「身に付いた」のような記述があったことは、読んで理解する力が増進したことの説明となっていると考えられる。つまり、遠隔授業「心理学概説」は、学生の「わかる」感覚をベースとした積極的な学ぶ姿勢があってこそその「わかる」講義の実現であったと考えられる。

(2) 学生と教員のコミュニケーション

遠隔授業を行うことで、対面授業での学生と教員のコミュニケーションの必要性が再認識された。

遠隔授業の問題点として「質問の回答や復習が少なかった」との記述から、授業の中での質問への回答や補足説明を求めていることが考えられた。また「対面で説明を聞きたかった」という記述から、対面の中で生み出される対話の中での説明の重要性が考えられた。

講義直後になされる質問により「わかったという感覚」を得ることができる。また、質問をして自分にとって勉強になる答えがかえってくることを通して「この先生にこれからもいろいろ質問してみよう」という勇気を得るためには、質問は十分な効果がある。さらに、質問をすることで、講義に積極的に参加している感覚や、学びが進んでいるという安心感をも得ることができるのではないだろう

か。

ところで、質問をすることに関連して、心理学概説の対面の講義では、最後に質疑応答の時間を設けている。通常の対面授業では約100名の履修生のうち、数名の方からの質問がある。また、全講義15回のうち中間と終盤の2回の講義のそれぞれ30分くらいを用いて、質疑応答専用の時間を設けている。例えば全講義のうちの中間の1回目の質疑応答では、学生は前半6回分の講義を復習して、質問点や疑問点をよく考えて記述して提出する。その質問の山に対して、質疑応答の時間に教員は時間のゆるす限り答えていく。学生がよく学んで提出した質問の中には、講義的を得た質問や、質問と一緒に考えることによって学びが深まる、まさに「良い質問」が多くある。教員がうなる質問が出されたときには、臨場感のある良質の学びをすることができる。教員が困っている姿は学生にとっては刺激的であり、学びを深めるきっかけにもなる。緊張感のある学びの場ということができる。このような臨場感、緊張感、わくわく感は対面授業でこそ得られるものである。

心理学では「聴く」ことを重視する。「聴く」とは傾聴ともいわれ、全身全霊を使ってその人の言葉や非言語を聞き取ることが求められる。とくに言葉にならない非言語を聴くという訓練を行い、日常では聞き取れないことばを聴いていく。ロジャーズ（1961）は、「クライエントは相手が自分の感情に受容的に傾聴していることに気づくにつれて、少しずつ自分自身に耳を傾けるようになっていく。彼は自分の中から伝えられるものを受け取り始める（ロジャーズ，1961，p62）」と記している。クライエントは、聴いてもらうことを通して、クライエント自身が自分を傾聴することを学び、自分自身を受容することを学んでいくのである。

心理学の授業では、心理学を題材にしながら同時に「聴く」訓練をも行なっているといっても過言ではない。講義を通して教員も学生も傾聴の訓練をうけているかのようである。教員にとっては、講義をしながら学生の態度やしぐさ、表情から学生の言葉を聴く訓練をし、それに応答して講義を行なう。学生もまた、講義を聴き、教員の言葉とともに、言葉ではない言葉である態度やしぐさ、表情などを聴いて、講義内容を学びとっているのではないだろうか。その中には、さきほど述べた「わかる感覚」にあわせて、安心感、臨場感、緊張感など様々な感情的な感覚も含まれている。

「聴く」ことには、感情を聴くことも含まれる。感情を聴くことは傾聴では重視される。そのため、感情的な感覚を感じ合うことはきわめて重要なことであるといえる。ロージャーズ（1942）はカウンセリングにおいて習得するのがもっとも難しいスキルとして「表現されている感情に注意を払いながら応答する技術（ロジャーズ，1942，p121）」を挙げている。

コロナ禍により、音楽、演劇、スポーツなどの分野において、多くの「無観客公演」や「オンライン配信」がなされるようになった。それに伴い、高名な音楽家、俳優、選手などのインタビュー記事も目につく。空間を客と共有している場合と無観客の場合との相違点について、彼らは異口同音に大きな差があると語っている。客の歓声、拍手、それがなくても単なる笑顔、視線、息づかいだけでも同じ空間に在れば、パフォーマンスはその客たちに向けられる。客たちは、彼らのエネルギーやメッセージをわざわざこの場まで足を運んで受け取りに来たから今こそ受け取ろうという温かい意志力を発している。こうした同じ空間に在る観客に向けられるからこそ、音楽家、俳優、選手などのパフォーマンスの質も量も増幅されるのである。同様に、教室における教員と学生たちも、場を共有することでこそ学びの質や量が増幅すると考えられる。新しい知への食欲性、「わかった」という楽しさ、質問の雨により引き出されていく知識や理論の躍動感といったものは、場の共有によってこそ得られるものである。遠隔授業に様々なメリットがあることを考慮しても、やはり学びにおいて教員と学生との直接的なコミュニケーションに勝るものはないのではないか。

そもそも、学生は教員との対面のコミュニケーションに何を求めているのだろうか。「コミュニケーションが取れないことは残念だ」「対面でないとどうしても意欲がかけてしまい」とあるように、対面だからこそ体得できる先述の学びのエネルギーのようなものの存在を学生たちも気付いているのではないかと考えられた。教員も、学生とコミュニケーションが取れないことが残念であり、対面でないとどうしても意欲がかけてしまうことがあった。学生と教員の対面での対話から生まれる学びの楽しさ、うれしさなどのエネルギーの体得、または相互のエネルギーの補完は空間の共有にあるのではないだろうか。

（3）学生同士のコミュニケーション

「対面授業だと知り合いが一緒だったり」という記述にあるように、対面授業の果たす役割として、友達と一緒に学ぶ場を提供することが挙げられる。友達と一緒に学ぶ事の効果は教え合いや励まし合いができることである。そして何よりも楽しい。学友がいることは学びを促進する効果がある。また「友達ができたり」の記述から、授業は友達づくりの場としての役割も果たしている。とくに、心理学概説は、2年生になり、心理学専攻科目を学びは始めるときに履修する講義である。心理学概説の講義の場が、これから心理学を学ぼうとするものたちの出会いの場であることがわかる。

たとい知り合いでなく同じ教室にいるだけの、パターソン（2013）の言う「焦点の定まらない相互作用」であっても、授業は大切な学生同士のコミュニケーションの場所である。つまり例えば、教員の解答に満足したときに、知らない学生同士で目が合い、つい微笑みを交わしたりするだけの小さい非言語コミュニケーションであっても、教室という同じ空間を共有することで学生にとって相互に無形の効用が生じる。まして、講義のあと「あの質問は自分もしたかった」といった話ができれば、その交流は学習上も精神安定上もどれほど有益であり、かつ楽しいことか。雑談ができにくい遠隔授業では、どんなに質の高い教材を作り上げて提供しても、場の共有をしていれば容易であったこのようなコミュニケーションや出会いを根こそぎ不可能にしてしまっているのである。些細なことのように見えて、それこそが若い伸び盛りの知性に何より必要なものだったのかもしれない。学生同士の出会いを、コロナ禍の遠隔授業は失わせた。教員は何によってそれを代替させられるのか現状では見当もつかない。これについては今後の課題としたい。

教員にとっての学生との出会いの場は、学生にとっては、教員と友達との出会いの場であった。教員にとっての教える場は、学生にとっての学ぶ場、教え合いの場であることが考えられた。学生同士の教え合いが盛んである授業はいかに活気のあるものであろうか。学生同士が出会い、学生同士が教え合う場としての、講義の場を再確認することができた。

おわりに

遠隔授業「心理学概説」の教育実践により、わかる感覚とコミュニケーションの重要性が再認識された。学生がわかる感覚を得るためには、教員の工夫された授業とともに、学生の積極性が必要であることが示唆された。コミュニケーションの重要性として学生と教員のコミュニケーションでは、対面授業において学ぶエネルギーのやりとりがあることが考えられた。また、学生同士のコミュニケーションでは講義が出会いの場、教え合いの場となっていることが考えられた。

遠隔授業の実践により、対面授業の重要な要素を再確認することができた。対面授業が再開されたのちは、対面授業を行なうことができる喜びとともに、これらの利点を心にとめながら学びを深めていきたい。

調査に協力してくださった受講生の皆様に感謝の意を表します。

参考文献

Carl R. Rogers (1942) Counseling and Psychotherapy : Newer Concepts in Practice.
Houghton Mifflin Company.

C. R. ロジャーズ (著) 末武康弘 保坂亨 諸富祥彦 (共訳) (2005) 第3部 カウンセリングの過程 第6章 感情の解放 pp120-158 『ロジャーズ主要著作集1 カウンセリングと心理療法-実践のための新しい概念-』岩崎学術出版社

Carl R. Rogers (1961) On Becoming a Person : A Therapist's View of Psychotherapy.
Houghton Mifflin Company.

C. R. ロジャーズ (著) 諸富祥彦 末武康弘 保坂亨 (共訳) (2005) 第2部 どうすれば私は援助的でありうるか 第4章 心理療法について何を知りえたか—客観的観点および主観的観点からpp59-68 『ロジャーズ主要著作集3 ロジャーズが語る自己実現の道』岩崎学術出版社

Miles L.Patterson (2011) More than Words : The Power of Nonverbal Communication.
EDITORIAL ARESTA

マイルズ・L・パターソン著 大坊郁夫 監訳 (2013) 『ことばに出来ない想いを伝える：非言語コミュニケーションの心理学』誠心書房 p116